

2021. 5. 16. 主日礼拝説教

聖書：ミカ書 7章 14-20節

『罪を赦される神』

ミカ書というとやたら聞き慣れない預言書と思いがちでしょうが、意外にわたしたちにとって親しみ深い内容が含まれています。例えば、マタイ福音書はミカ 5章 1節を引用してキリストの誕生の地がベツレヘムであると証言しているし、又、同 4節では「彼こそ、まさしく平和である」と語ります。更に、同 3節では羊飼いのイメージさえもミカ書に端を発することが分かります。おそらく福音書記者にとっても重要なテキストのひとつだったのです。

聖書によると、預言者ミカの活動期は結構古く、おおよそ紀元前 725年頃から 701年頃だろうと言われます。実際にはBC3世紀頃に編集されています。同時期、北イスラエルには預言者アモス、ホセアも登場しています。これらは古来からイスラエルの存在を証明づけようとする後代の試みでした。ミカの出身は南王国ユダの首都エルサレムから南西 35 キロにあるモレシエトとという村でした。ミカは農村出身であり、それゆえ全編を通して階級制外の地の民の声を匂わせています。さて、なぜこの時期に預言者の乱立、つまり多くの記録が後の世に創作されたのかというと、それパレスチナが未曾有の危機に晒されていたからなのです。アッシリア帝国の侵攻という歴史的事実です。古代中近東という世界にとってそれまでの版図を塗り替える大国アッシリアの台頭は、中近東諸国にとって初めての対応すべきマニュアル外の大事件だったのです。この事件にイスラエルも遭遇したのだという証言と、そこで預言者たちの働きを記述しておきたかったのです。紀元前722年、北イスラエルは首都サマリヤを攻略されて滅亡します。

愛する者を守るべくもなく、ただ死をのみ待つ世界とはどんな環境なのでしょうか……。愛する者に開かれた希望溢れる未来に向かってその背中を押し出してやることのかなわない悲しみとはどのようなものなのでしょうか……。国家の無策の代償を真っ先に喰らう地の民と共にあるミカにとってこれらは眼前の険しい問いでありモチーフでもあったことを考えます。

そのような状況下でミカは従来の古典的律法理解に新たな問いを提示するの

です。ミカ書の構造は 1～ 3 章は裁き、 4～ 5 章は救い、 6～ 7;7 は裁き、 7;8～ 20 は救いです。裁き・救い・裁き・救いという構造です。裁きに終始するのではなく、救いによって必ず終えることが人生であると語るのです。

ミカはそれまでの怒り・妬み・嫉むという裁きの神理解から「赦し・慈しみ・憐れむ (7 章 18～ 19 節)」という神理解へと大きくシフトして行きました。上記したアッシリアの包囲という厳しい現実は何も変わらなかったことでしょう。しかし、そのミカの言葉を聞いた人々は大きく変えられたのです。それはただ死を待つ渺茫たる世界が待っているのではないということ、絶望に閉塞され未来さえも垣間見ることが許されないなどということは決してないということなのです。人々はどれだけこの言葉に慰められ、神の慈しみと赦しを実感し、自分たちが裁かれるだけの存在ではなく、実は愛されている存在なのかを感謝をもって噛みしめたか知りません。

この「罪を赦される神」理解はその後「愛の神」としてマタイにより新約聖書へと繋げられて行きました。怒りは刹那的であり、赦しは永遠の救いなのだというミカのメッセージをわたしたちはキリスト・イエスを通して今確認するのです。